ストーリー

関東平野の中央部に位置する行田市は、日本一の足袋生産地として知られ、足袋産業全盛期を偲ばせる足袋の倉庫「足袋蔵」が今も数多く残る“足袋蔵のまち”です。表通りに土蔵造りの見世蔵が建ち並ぶ“蔵のまち”は各地にありますが、行田はそうした“蔵のまち”とは異なり、足袋蔵のほとんどが裏通りに建てられています。蔵の造りも土蔵造りだけでなく、石造、煉瓦造、モルタル造、鉄筋コンクリート造、木造と多彩です。いつどのようにして「足袋蔵の町並み」が形成されたのでしょうか。

1.足袋づくりの始まり

利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを 原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。 行田足袋については、「貞享年間亀屋某なる者専門に営業を創めたのに起こり」との伝承があり、享保年間（1716～1735）頃の「行田町絵図」に３軒の足袋屋が記されていることから、１８世紀前半には生産が始まっていたと思われます。享保年間に忍藩主が藩士の婦女子に足袋づくりを奨励したとの伝説があるように、その後足袋づくりは盛んになり、 明和２年（1765）の「東海木曽両道中懐宝図鑑」に「忍のさし足袋名産なり」と記されるまでに、広く知られるようになりました。足袋には株仲間がなく、 取引が比較的自由に行えたことから、足袋づくりは益々盛んになり、天保年間（1830～1844）頃には２７軒もの足袋屋が、行田のまちに軒を連ねるよう になりました。

----------江戸時代の足袋----------

行田足袋の始まりは約 300 年前。武士の妻たちの内職であった。

近世になると行田市周辺地域では藍染の「綿布生産」が盛んになり、これを原料に行田のまちで「縫製技術」を生かして「足袋づくり」が始まった。

■行田の足袋蔵は、遅くとも江戸時代後期頃には建てられ始めていたようで、弘化３年（1846）の大火の際に足袋蔵が延焼を食い止めています。足袋蔵は商品や原料を扱いやすいよう壁面に多くの柱を 建てて中央の柱を少なくし、床を高くして床下の通気性を高めるな ど、内部の造りに特徴があります。

江戸時代の足袋に関する記録が残されているのが「秋山家」と「橋本家」。

「秋山家」は享保 17 年(1732)創業と伝えられる行田有数の老舗:屋号は髙砂屋(当主は代々金衛門を襲名)。創業時は質屋、酒屋などを営み、その後「足袋屋」を営ん

だようである。「橋本家」は足袋屋のほかに木綿問屋などを営んでいた行田最大の商人であり、屋号は荒物屋(当主は代々喜助を襲名)であっだ。個人による製造・営業から抜け出して生産・販売を担う「足袋屋-下請け-内職」といった原型がすでに 19 世紀から見られる。

江戸時代の足袋蔵エピソード①

江戸時代の行田町は幾度かの大火に見舞われましたが、その中でも弘化 3 年(1846)の大火は記録的なものでした。この大火の火を止めたのが「大澤久右衛門」家の蔵造りの建物です。そしてこれを契機に「今津印刷所」「古蛙宴」

など防火に有効な蔵造りの建物が多くたてられるようになりました。住宅部分については風が吹き付ける側だけを塗り壁としています。行田は冬に北西方向に風が吹くことから住宅部分については風が吹き付ける側だけを塗り壁としています。こうした「半蔵づくり」の建物が行田の蔵づくりの大きな特徴です。江戸から明治にかけて、土蔵は外壁を漆喰などで仕上げ、壁も厚くし火災や盗難などに備え、かつ外観に装飾などを施すものもあり、象徴としても盛んに造られたようです。また、この大火は天万稲荷神社より南側へは燃え広がらなかったため、お稲荷様が日除けをしてくれたのだという言い伝えから、各家の敷地奥に屋敷稲荷が祀られる風習があり、現在でも祀られる家が多く存在しています。さらに、”丙午は火にたたる”という言い伝えから、この日は一切火を使ってはならないというお触れが出ました。この防火デーの風習は長く続きました。当時の足袋づくりは大火事によって革足袋から綿足袋に移ってきたとはいえ、まだ商品として生まれていない状況であった。行田足袋を忍藩主の奨励(内職)と考えられます。

江戸時代の足袋蔵エピソード②

足袋づくりの始まり。北埼玉地方では、江戸時代後期の１７８０年代頃に藍染めが始まったとされます。利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを 原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。行田市の足袋づくりには、利根川と荒川という 2 つの大きな川に挟まれた地形が関係しています。この 2 大河の間には、小さな川や水路が流れていて水がたくさんあることから、川の氾濫によって砂質土がつもり、夏は高温にてるのにぴったりでした。綿縫の技術が培われ、足袋づくなる。そんな特徴を持つこの周辺は、綿や藍を育布の産地となった近世の行田市では、しだいに裁りが始まりました。藍の香りが虫除けにもなることから、農民の多くが野良着（農作業用の服）として重宝したようです。高崎家の芭蕉句牌(たかはしけのばしょうくひ)。明治 9 年に当時の正覚寺に建てられています。碑表には右に「名月の花

かと見えて綿ばたけ はせを」と句が刻まれ、中央には孝協大徳を称える碑文が記されています。

江戸時代 http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/008.pdf

江戸棟上げ http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/102.pdf

① 江戸時代の足袋蔵